

顕浄土真実行文類二(五)

高田短期大学学長 栗原廣海

一、発願回向の解釈

名号のいわれを明らかにするために、善導大師の『観経疏』「玄義分」から、

南無と言うは、すなわちこれ帰命なり。またこれ発願回向の義なり。阿弥陀仏と言うは、すなわちこれその行なり。この義をもつてのゆえに必ず往生を得。

を引用し、詳しく御自釈されている中から、前回「南無」が有する「帰命」の意味についての聖人の釈を考察しました。今回は、「南無」の二つ目の意味であるとされる「発願回向」についての聖人の解釈を考えたいと思います。次のように言われます。

発願回向というのは、如来すでに発願して衆生

の行を回施したまうの心なり。

(発願回向とは、阿弥陀如来が因位の法蔵菩薩のときに衆生救済の大悲の願を發し、私たちに往生の行を施し与えてくださる仏心である)

「回向」については以前にも考えましたが、その意味は「回轉趣向」であるとされ、「自ら修めた功德を自らの悟りのために、または他者の利益のためにめぐらし、さし向けること」である一般的なには解釈されていますので、「発願回向」とは、「行者が自ら浄土へ往生したいとの願を發し、自ら修めた功德を往生のためにさし向けること」であると解釈できます。

これに対し聖人は、「発願回向」は阿弥陀如来が久遠の昔、法蔵菩薩であったころ、衆生救済を發願して五劫思惟の末に四十八願を建立し、兆載永劫の修行を経てそれを完成し、衆生に往生の行を施し与えてくださることであると、「発願」も「回向」も衆生のはたらきではなく、阿弥

陀如来のはたらきであると解しておられるのです。そして「廻施される衆生の行」とは、『一念多念文意』に、

回向は、本願の名号をもつて十方の衆生にあたへたまふ御のりなり。

と言われるように、六字の名号、すなわち「南無阿弥陀仏」であると明言されています。阿弥陀如来は名号を成就し、それを衆生に施し与えてくださる、それが「回向」であると言われるのです。

『正像末法和讚』「愚禿悲歎述懷」第四首には、無慚無愧のこのみにて

まことのこころはなけれども  
弥陀の回向の御名なれば  
功德は十方にみちたまう

とうたわれ、「御名」すなわち「名号」が弥陀によって回向され、その功德によって慚愧心のない不実の凡夫が救われることが示されています。

「南無」とは、衆生が仏の教えに随順して浄土に生まれたいと發願し、功德善根を積んで浄土往

生にさし向ける衆生の「南無」ではなく、阿弥陀如来が本願を發して成就した名号を衆生に回向しとてくださり、その徳を受け取って浄土に來いと喚びかけてくださる、如来の「南無」であったのです。「南無」は、「帰命」の意味においても、「發願回向」の意味においても、ともに衆生のはたらきではなく、如来のはたらきであることが明らかにされているわけです。

二、即是其行の解釈

次に、  
即是其行というのは、すなわち選択本願これなり。

(即是其行と言うのは、衆生を救うために選

び取られた本願の行と言うことである)  
び取られます。これは善導大師が、「阿弥陀仏と言うは、すなわちこれその行なり」と言われている箇所についての解釈ですから、「その行、すなわち阿弥陀仏というのは、選択本願である」と言っておられることとなります。

右にも述べたように、阿弥陀如来から回向される行、すなわち「選択本願の行」は「名号」「御名」等と言われ、それは「南無阿弥陀仏」であつて、「阿弥陀仏」ではありません。これはどのように考えればいいのでしょうか。これについては古来いろいろな解釈が行われてきたようです。ここでは『教行信証講義』に記されている説を紹介しします。

「真宗では、二字即六字、四字即六字と言つてゐる。善導大師の六字釈は、「南無」の二字と「阿弥陀仏」の四字とに分けて解釈しているけれども、二字は六字を離れた二字でなく、六字そのままの二字である。それゆえ、「帰命は本願招喚の勅命なり」と言ったのである。「南無阿弥陀仏」の六字が来いよ来たれよの勅命であるが、それを二字に撰めて「帰命とは本願招喚の勅命なり」と言ったのである。「阿弥陀仏」の四字も同様で、六字の中、二字を離れた四字ではなく、六字そのままの四字である。それゆえ、「即是其行」といはす。

こまでも「南無阿弥陀仏」の名号であることが説明されています。

### 三、必得往生の釈

続いて、善導大師の「この義をもつてのゆえに必ず往生を得」を釈して、

必得往生というは、不退の位に至ることを獲ることを彰わすなり。『経』には「即得」と言い、釈には「必定」と云えり。即の言は、願力を聞くに由りて報土の真因決定する時剋の極促を光闡するなり。必の言は、審なり、然となり、分極なり、金剛心成就の貌なり。

（「必得往生」とは、この世で不退の位に至ることをあらわしている。『無量寿経』には「即得」と説かれ、龍樹の『十住毘婆沙論』には「必定」と言われている。「即」は、本願のいわれを聞くことによつて、真実報土に往生できる因が決定する、まさにその時にという時の極まりを明らかに示されたものであ

すなわち選択本願これなり」と言われたのである。「阿弥陀仏」の四字が「選択本願の行」ではない。「南無阿弥陀仏」の六字が「選択本願の行」である。だから聖人は「行文類」の最初の二行の細註に「選択本願の行」と記されたのである。善導大師の思し召しも同じで、上に「南無」の二字を釈し終わったから、次に「阿弥陀仏」といはす」と四字を出されたままで、やはり六字の仏名を「即是其行」と言われたのである。このことは、『観経疏』「玄義分」の釈名門に「無量寿というはすなわちこれこの地の漢音、南無阿弥陀仏というは、またこれ西国の正音」とあつて、先に「南無」の訳語の「帰命」を除いた「無量寿」の三字について説明しておきながら、その後には六字名号全体を説明していることからしても、善導大師の御心が六字即ち四字で、六字全具の阿弥陀仏を「即是其行」と釈されたのであることが明らかに知られるのである。

阿弥陀如来から回向される選択本願の行は、どる。「必」の字は、明らかに定まるといふことであり、本願力の自然の道理をあらわし、迷いの世界にありながら、それから分かれてさとりを極めるべき正定聚の位に定まることであつて、金剛石のような堅い信心を得ているすがたである（

）と言われます。

善導大師が「必ず往生を得」と言われる往生は、言うまでもなくいわゆる当益であり、南無阿弥陀仏を称える者は命終後、必ず浄土に往生することができるとあらわされています。なぜ往生できるのかと言えば、「この義をもつてのゆえに」、「すなわち、「南無阿弥陀仏」の名号は、「願」と「行」を具足していて、浄土に往生する条件を欠け目なく具えているからであると言われているのです。

しかし聖人は、「必ず往生を得」とは、この現世で「不退の位」に至ることであると理解されたのです。以下、次回を期したいと思います。